



花粉症、風邪の時期になると行く耳鼻科医院がある。女医（以下、A先生という）とパートの手伝いのおばさんの2人でしている小さな診療所で、自宅と最寄りの駅の間であり、20年近くのおつきあいになる。

建物は古く、小さな待合室は10人も入れば一杯になるため、庭のベンチに座って待たなければならない。待合室が一杯であることを知って、「また出直します」と帰っていく患者もいる。待っている患者のことを考えて、迅速に診察し患者をさばいていけばよいと思うが、A先生はあくまでマイペースで、診察している患者からの質問に答え続けている。そして、最近でこそ漸くパソコンを導入されたが、それまではソロバンで医療費を計算していた程である。こんなわけで、冬の込む時期では1時間以上待たされることは珍しくない。

弁理士受験時代、待ち時間がもったいなく思え、駅に近い近代的な耳鼻科医院に変えた。広くてきれいな待合室に、10分程待っただけで診察を受けることができた。診察も大変スピーディで、患者の質問に答えることもなく、「はい、次の人」。医院に入って出までの時間はわずかであり、時間節約の要望には十分応えてくれたのだが、2週間通院しても治らない。鼻からの出血が止まらなかったのである。とうとう、A先生のところへ行った。相変わらずの待ち時間と丁寧な診察。しかし、3日も通院すると、すっかり良くなった。このとき以来、我が家では耳鼻科はA先生と決めている。

内科ではあるが、個人のクリニックにしては珍しく近代的設備を整えた大きな医院が、自宅の近くに開業した。骨密度の測定もしてもらえる。最近では、音楽を聴きながらマッサージをする機械まで導入された。母は定期的に導入される最新の設備に惹かれて通院しているが、私は、一度、風邪で行った程度である。問診で、「熱が少しあって、たぶん風邪だと思うのですが…」と応えると、口の中を診たくらいだろうか、特に診察らしい診察を受けることなく、「風邪でしょう。点滴しましょう」。

昨年、アメリカからの留学生が我が家にホームステイしていたときのこと。疲れが出たのか、微熱が出たため、この内科クリニックに留学生を連れて行った。風邪ということで5種類の薬を渡された。

そのとき、彼女は「I don't believe. One medicine for one disease in my country.」と言って、薬を投げつけた。確かに、風邪如きで5種類も薬があるのは、不思議である。

再び、A先生のこと。A先生は薬を無理強いしない。珍しく3日以上通院しても治らなかったとき、「薬変えてもらえますか」とお願いすると、

「今、渡している薬が一番いいものだから、これで治らないのなら、他に变えても治らないわよ。もう3日ほど、飲んでみよ」。

それから、3日も飲まないうちに治った。

A先生は個々の事情を理解してくれる。7時に受け付けが終わり、診察が終了する8時頃に入って、

「すみません。今から診てもらえますか？仕事で遅くなって…」と無理を言うと、

「仕方ないわね。」と行って、片づけかけていたところ、再びマスクをして診察してくれた。私的なことであるが、受験時代、「何時頃に行けば空いていますか？時間があまりないのですが…」と愚痴をいっていたためか、試験に合格したときは、「よくがんばったわね。本当に良かったね。」と喜んで下さった。もう、我が家はA先生のファンである。耳鼻科に関しては、他の医院へ行こうという気にはならない。A先生のファンは我が家だけではないらしい。狭い待合室で待ちながら、「A先生は丁寧に診てくれるから。ここでないと治る気がしないのよ」という評判をよく耳にする。

20年前も今も、狭い待合室、古い建物は変わらない。長い待ち時間を多少苦慮してか、番号札制となり、番号札だけを先にとっておき、時間を見計らって行くことが可能になったことくらいである。A先生は医院を大きくすることを望んでいないようである。ファンの方も、最新の設備を備え、きれいな建物となった代償として、A先生らしさがなくなるのであれば、このままでよいと半ば諦め、患者の方でA先生のペースに合わせている。開業医院が増えていく中、固定ファンに守られている小さな診療所である。ファンを自称する私も、待ち時間は読書時間と割り切って、A先生の診察を今年も受けた。